JMSCA 登山月報 第600号 平成31年３月15日発行
昭和45年12月12日第三種郵便物認可（毎月一回15日発行）

登山月報

チョンブー（6,362m）

野中生萌

第14回ボルダリングジャパンカップ駒沢 …… 2
第124回 Mountain World …… 4
新連載『日山協と私』 …… 5
平成30年度後期海外登山奨励金選考結果 …… 6
平成30年度 山岳レスキュー講習会（積雪期・東部地区）報告 …… 7
第９回自然保護指導員研修会の実施報告…… 8
2018/2019 ＩＳＭＦワールドカップ参戦記 …… 9
平成30年度全国理事長会議報告 …… 12
JMSCA、寄贈図書、表紙のことば、編集後記 …… 12

No.600

第14回ボルダリングジャパンカップ駒沢

スポーツ振興基金
独立行政法人日本スポーツ振興センター

第14回ボルダリングジャパンカップ（14ＢＪＣ）を昨年と同じく駒沢で開催した。女子は野中生萌、男子は石松大晟がともに初の栄冠に輝いた。今年は、８月にクライミング世界選手権八王子（オリンピック予選）を控え、その国内予選として、各ジャパンカップ（ＢＪＣ、ＳＪＣ、ＬＪＣ、ＣＪＣ）があたる。選手からも一大会でなく全体をどう戦っていくかの雰囲気が伝わってくるこの頃、2019スポーツクライミングシーズン幕開けとして重みを感じた大会であった。そして、決勝の観戦チケットは今までで一番早く完売となった。当日の朝、５：30から開場待つお客様が約100人ほど並ぶなど国内の注目も非常に高まってきていると感じた。

会場　駒沢オリンピック公園屋内球技場
日時　2019年１月26日（土）予選
　　2019年１月27日（日）準決勝、決勝
選手　男子72人　女子50人
観戦（選手含む）　26日786人　27日1679人（発表値）

【女子】

女子準決勝は、厳しい課題と感じた。決勝へは、中村真緒が３完登１位通過しそれに伊藤ふたば、野口啓代、野中生萌と日本のトップが続き、またそこに若手の平野夏海、倉菜々子が喰いこんだ。若手が活躍した倉吉のアジア選手権ボルダリングを思い出す。

順位	姓名	課題W1		課題W2		課題W3		課題W4		完登	Zone	ファンアート		準決勝
		T	Z	T	Z	T	Z	T	Z			完登	Zone	
1	野中生萌	2	1	2	2	×	1	3	1	3T	4Z	7	5	4
2	野口啓代	2	1	×	×	2	1	3	2	3T	3Z	7	4	3
3	伊藤ふたば	1	1	4	4	×	1	×	3	2T	4Z	5	9	2
4	平野夏海	×	1	×	×	×	1	×	4	0T	3Z	-	6	6
5	倉菜々子	×	2	×	×	×	4	×	2	0T	3Z	-	8	5
6	中村真緒	×	4	×	×	×	4	×	7	0T	3Z	-	15	1

ただ決勝では、やはり日本のトップが実力を発揮した。第１課題、伊藤が一撃完登。野口、野中が２アテンプトの完登と続く。そして第２課題目は左に連続気味にラウンジするムーブ。野中、伊藤は完登するが、野口はゾーンを獲得できず。第３課題は半円形のシェイプが連続し、あらゆるムーブのテクニックが必要と感じる内容。それを唯一野口が完登。女王の底力が発揮された見事な登りで３人が２完登で並んだ。

最終課題はスタート後、レイバック風の体勢から大きなシェイプを取りに行くムーブ。野中はダブルダイノ、野口は体をうまく伸ばしてホールドをつかみ完登。次、伊藤が優勝するには１撃での完登が必要となる。コールゾーンでタイムリーにリザルトが見られる現在、優勝を意識してか、しっかりルートを見定めてから取り付くがシェイプを止めきれずフォール。結果ゾーンの獲得数で上回った野中の優勝が決まった。見ごたえのある争いに会場は大いに盛り上がった。

野中生萌

野口啓代

伊藤ふたば

【男子】

男子はまず波乱が起きた。世界選手権2018ボルダリング優勝の原田海が予選落ちとなった。そして準決

順位	姓名	課題M1		課題M2		課題M3		課題M4		完登	Zone	アテンプト		準決勝
		T	Z	T	Z	T	Z	T	Z			完登	Zone	
1	石松大晟	1	1	4	3	3	1	×	×	3T	3Z	8	5	2
2	楢崎智亜	×	2	1	1	2	1	×	3	2T	4Z	3	7	1
3	土肥圭太	2	1	2	2	×	1	×	9	2T	4Z	4	13	6
4	村井隆一	1	1	2	1	×	1	×	×	2T	3Z	3	3	5
5	杉本怜	4	1	4	4	×	6	×	×	2T	3Z	8	11	4
6	藤井快	×	1	1	1	×	1	×	×	1T	3Z	1	3	2

石松大晟

楢崎智亜

土肥圭太

勝は、非常に厳しい内容で１位通過の楢崎智亜が２完登、あとは１完登での決勝進出。男子決勝どうなるのだろうという雰囲気の中、第１課題が始まる。第１課題はスラブのバランシーなムーブ。石松大晟、村井隆一が１撃するなか、なんとボルダリング世界ランク２位の楢崎智亜、ＢＪＣ３連覇中の藤井快が完登できずに終わる。２課題目は、かぶった壁のパワフルな課題。全員が完登する。楢崎、藤井は１撃で盛り返す。第３課題は、壁の中央のホールドに立ち上がり、やっと手が届くようなムーブ。石松と楢崎が完登。石松が３完で一歩リード。そして、第４課題は全員が完登できず。楢崎、土肥がゾーン獲得するのが精いっぱいだった。その状況下、楢崎はいろいろなムーブで挑み最後まであきらめない取り組みが会場を大いに盛りあげた。そして、３完の石松の優勝が決まった。

【運営】

●新たな取り組み

会場スポーツクライミングの観戦体験での差別化（会場での価値向上）、運営の合理化を図るため以下の取り組みを行った。

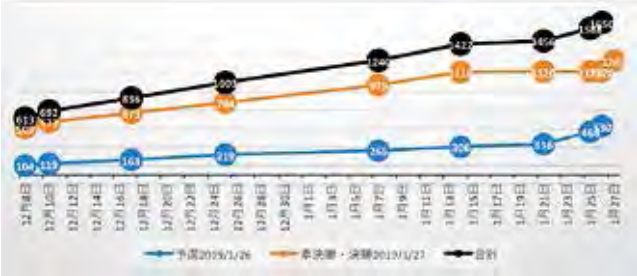
▶モニター：選手の完登状況、課題の完登の率表示

▶オンラインジャッジビデオ：タイムリーに選手の競技状況を確認。

▶オンラインオブザベーション：決勝各課題前に、モニターにルートの画像を表示。ルートの特徴を説明。

▶組織：オリンピックフォーマットへ

▶自由視点リプレイ映像配信：会場で観戦ができないお客さまにスマートフォンやタブレットから自由な視点操作を体験できる映像の提供。（ＫＤＤＩ、チームau選手）



【マーケティング】

●チケット

26日　530枚（13ＢＪＣ　427枚）

27日　1242枚（13ＢＪＣ　1150枚）

●メディア

26日　65名31社

記者18名、フォト21名、ＴＶ26名、ＥＮＧ６台

27日　105名46社

記者27名、フォト39名、ＴＶ39名、ＥＮＧ９台

●物販（パンフ）26日　124部、27日　182部

【総括】

大会は各ステークホルダーが満足できるよう、毎回あらたな取り組みを行っている。今回も“見せる”“運営の合理化”という取り組みを行った。そして今年予定している世界選手権に向けて十分対応できるチームが出来上がってきたと感じる大会であった。最後に、開催に御尽力いただきました関係各位に対し、厚く御礼を申し上げます。　（実行委員長　村岡正己）

第124回 Mountain World

冬季ナンガ・パルバットで行方不明

池田常道

今季の冬季8000ｍ峰登山は、マナスル（8163ｍ）に挑んでいたシモーネ・モーロ（イタリア）とペンバ・ギャルジェ・シェルパが６ｍもの降雪に閉じ込められ、物資の不足をきたして、２月初めにヘリで脱出。残るはＫ２（8611ｍ）の旧ソ連邦三国合同隊（ロシア、カザフ、キルギス）とスペイン＝ポーランド＝ネパール（シェルパ）隊、ナンガ・パルバット（8126ｍ）のイタリア＝英国ペアだけになった。

いち早く入山していたナンガ隊は、イタリアのダニエーレ・ナルディ（42）と英国のトム・バラード（30）にパキスタンからラフマット・ウラー・ベグとカリム・ハヤットを加えた４人編成。さっそく行動を起こし、１月10日にはママリー・リブ取付きの5700ｍに物資を荷揚げし、15日そこにＣ３を建てた。

しかし、その後は降り続く雪に妨げられ、前進するどころか埋まったテントを掘り出す作業に忙殺された。長引く停滞で物資に不足をきたした二人は、２月中旬にポーター24人による追加荷揚げを受けて攻撃を再開、リブの6300ｍ付近まで達していた模様だが、２月24日を最後に連絡が途絶えてしまった。

7000ｍより低い高度では天候が安定しているので、晴れ間をとらえて飛んだヘリのパイロットは雪崩の痕跡と半ば埋められたテントを視認したというが、２月28日に行なわれた２回のフライトでは、新たな発見はなかった。また、ムハンマド・アリ・サドパラ（2016年にナンガ冬季初登頂者のひとり）を含む救援隊がヘリでＢＣに運ばれた。Ｋ２に挑戦中の旧ソ連三国合同隊のワシリー・ピフツォフ隊長は救援メンバーを送ると確約。同じくアレハンドロ・チコン（スペイン）も自身を含めて４名が２機のドローンを携えてナンガＢＣに駆けつけるためヘリを要請したが、陸軍ヘリを運営するアスカリ・エアは料金の前払いを要求。貴重な数日が空費され、次のフライトは早くても３月２日にずれ込むという。

＊

このリブは西壁の右寄りに位置し1895年に初めてこの山を目ざしたＡ・Ｆ・ママリー（英）がグルカ兵ラゴビール・タパを連れて6100ｍ付近まで試登したもの。1939年のドイツ隊では、遭難・敗退を繰り返したラキオト氷河に代わるルートを求めて、ハインリヒ・ハラーとハンス・ローベンホーファーが試登した。1970年に南壁を初登攀して頂上に立ったメスナー兄弟は、この岩稜に沿ったクーロワールを下降した。

ナルディは、頂上ピラミッド下の雪田までダイレクトに続くこの岩稜に目を付け、2013年以来一度ならず挑んできたが、6400ｍを最高到達点として敗退していた。2015年には西壁通常ルートから7850ｍに迫ったものの、アリ・サドパラが肺水腫の兆候を示したために下降を余儀なくされていた。

＊

一方Ｋ２（8611ｍ）では、ワシリー・ピフツォフ隊長の旧ソ連邦三国合同隊とアレハンドロ・チコン隊長のスペイン＝ポーランド＝ネパール（シェルパ）隊が、南東稜に取付いている。三国合同隊はブラック・ピラミッドのルート工作を終え、7200ｍにＣ３用の物資を荷揚げした。資金不足で一時は７名まで減った登攀メンバーは、追加資金を得て３名を増援することができた。7300ｍのＣ３設営を目ざしていたが、その途次Ｃ２が雪崩に流されていたことが判明し。Ｃ１から新たにテントを運び上げなければならなかった。チコン隊は、三国合同隊のフィックスを使わず、並行して自前の固定ロープを張りつつ、２月25日にチコンとチェパル・シェルパがＣ２（6650ｍ）に達した。

ＢＣから双眼鏡でナンガ・パルバット西壁を観察するアリ・サドパラ

新連載 ～創立60周年に向けて～ ⑽

『日山協と私』

埼玉県山岳連盟顧問　森下 健七郎

スポーツクライミング活動と私

小生が日山協・クライミング委員会常任委員として関わり始めたのは1997年だった。

日山協クライミング委員会に推薦してくれたのは都岳連の森川氏であったと後で聞いた。その頃、小生が全国高体連登山専門部でスポーツクライミングの普及活動を熱心に勧めていた事を評価しての事だと思っている。

その頃のクライミング委員会は、委員長の山崎順一さんを中心に、ＪＦＡ（日本フリークライミング協会）関係者が既に多く居た。北山真・山本和幸・飯山健治・小日向徹・東秀磯・大岩あき子さん等々である。他に堀江栄次さんを始め神奈川岳連の人達が複数名居た。

クライミング委員会は、スポーツクライミング゛競技として「ジャパンカップ」を年一回企画運営し、それに関わる関連普及整備活動をしていた。

一方、国体山岳競技は「縦走・踏査・登攀」の３種目が行なわれていて、その中の登攀競技は今のスポーツクライミング゛競技では無く、その担当部署も国体委員会だった。その２委員会を統括していたのは競技部長の故森谷重二朗氏だった。（その頃、ＪＦＡでは既に独自に「ジャパンツアー」として、１年に何戦かを行い年間チャンピオンを決める競技大会が活発に行われていた）

その後、1999年３月に、念願だった青少年向けの全国レベルのクライミング競技大会である「第１回ＪＯＣジュニアオリンピックカップ」大会（ＪＯＣｊｒ）をクライミングジム・パンプ１（埼玉・川口市）の会場借用協力を得て開催した。

オリンピック決定後の記者会見時写真（2）

アジア大会時のスタッフ風景写真（1）

小生等は、その前から関東の高体連登山専門部関係有志で、スポーツクライミング゛競技の啓発や競技会の企画運営の活動をしていた。その中で、千葉高体連登山専門部で熱心に活動していた目次俊雄さんも、この大会開催を契機に常任委員に入って貰う事になった。さらに、ＪＯＣｊｒ大会は神奈川（秦野）・埼玉（加須）を経て、４回大会から現在の富山県南砺市（当時は富山県・城端町）クライミングセンターで会場を固定して行う事になった2001年の事である。

この会場では、その次年にはアジアチャンピオンシップ（昨年、16年ぶりに鳥取・倉吉市で開催）も行われた事が懐かしく思い出される。（「写真１：スタッフ風景」参照）

小生は、2001年に山崎順一委員長から、諸般の事情から後任への就任を推薦（要請）されて引き受ける事になった。

委員長になってから、暫くして、「国体山岳競技がスポーツクライミングの導入を模索している」と言う流れの中で、クライミングと国体の２委員会の距離が縮まる契機になり、国体山岳競技にクライミング委員会が関わる事になって行った。（それまでは別々の競技として行って来たが、「スポーツ競技」として将来の在り方を見直した結果である）

小生がクライミング委員長として最後の2007年に秋田国体時の登攀競技の主任審判を要請され受けた。その次の大分国体からのスポーツクライミング導入（「縦走・踏査・登攀」から「リード・ボルダリング」に変わる前年である）

2008年５月末の総会で退任して古巣の埼玉県山岳連盟に戻り、その後、会長を要請されて受ける羽目になった。

埼玉県山岳連盟会長を５年務めて辞任する前の2014年に、再び日山協から競技部長への要請を受けた。元々日山協には戻る気は無く再三断ったが、１期２年の約束で受ける事になった。それは、オリンピッ

クでのレスリング競技除外検討問題に端を発して、スポーツクライミングが追加競技候補の一つとしてノミネートされて沸き立った時期だった。スポーツクライミングのオリンピック競技導入に向けて、若い人材に受け継ぐ為の環境整備のお役に立てればとの思いだった。日山協・新競技部は小生を部長に京才昭副部長・北山真（後に小日向徹）選手強化委員長・山本和幸技術審判委員長・高山雅夫（後に西原斗司男）国体委員長で船出した。

スポーツクライミングのオリンピック競技導入を念頭に置いて、クライミング競技のメディアへの啓蒙や露出、競技大会の視覚化や一般国民への啓発活動等を勧める事になった。世界大会での日本人選手の大活躍を元に、内外の話題になり、急速に認知度が広がる事になった。

その後、ＩＦＳＣのマルコ会長の強力な指導・連携の元、オリンピック追加種目候補から追加競技に決定した2016年８月４日岸記念体育館での決定記者会見に日山協・競技部長の立場として出席した事は忘れられない出来事である。関係者の皆様に感謝の気持ちで一杯だった。（参照：「写真２」決定後の選手を交えた記者会見）

しかし、決定後の日山協を取り巻く環境・特に色々な外部との対応の目まぐるしい変化は、小生の今までの経験による「来るものは拒まず、去るものは追わず」を基本の運営では太刀打ち出来ず、適切な人材の取捨選別等々、小生の対応能力の限界を超える判断が迫られる機会が多かった。

そこで、元々繋ぎ的に引き受けた役職だったので、オリンピックを目の前にもっと対応能力のある適切な人材へ引き渡さねばと思った。自分としては、引継ぎ人材確保に悔いのない様に、出来る限りの尽力をした積りである。

最後に、特にクライミング競技の大会開催運営をリードした北山真・山本和幸さん、選手強化に尽力した飯山健治・小日向徹（後年ＩＦＳＣとのパイプ役で大貢献）さん、クライミングテキストやセッター教育に尽力してくれた東秀磯・飯山健治さん、事務局でこれ等全般をサポートしてくれた中川裕さん、さらに、日山協・常任委員として、これらをサポートしてくれた全ての人へ感謝を述べたい。本当にありがとうございました。

これまでの数々の努力の成果を試すべく、東京2020オリンピックでのスポーツクライミング競技運営の大成功裡と選手の活躍に、応援大エール！を送りたいと思います。

平成30年度後期海外登山奨励金選考結果

日本山岳・スポーツクライミング協会では、海外登山の振興と技術の普及、向上を目的として、海外登山奨励金制度を制定し、斬新、独創的で、多大な成果の期待できる登山計画に対し、奨励金を交付しています。

後期（平成31年３月～平成31年８月出発予定の隊）は１隊のみの応募でした。厳正な審査の結果、奨励金を交付することを決定いたしました。

●日本カーメン登山隊2019（Japan Kamen Exp.2019）

期間：2019年５月10日～５月31日

隊員：澤田実、大部良輔、保坂朋秀

山域：ロシア・カムチャッカ州、カーメン峰（４,579ｍ）

内容：成層火山のカーメン峰の東面は、高差約１,500ｍの大岩壁を形成している。脆弱な岩質が予想されるため、アイスクライミング技術を使ったアルパインクライミングで登る。（南面へのルート変更もあり）

評価：地理的に近く、短期間で行ける新しいエリアの大岩壁に冒険的なアルパインクライミングでの挑戦に対して。広くカムチャッカの山々の情報収集にも期待を込めて。

交付額：40万円

第7回リードユース日本選手権印西大会2019

期　日　2019年３月23日（土）～24日（日）
会　場　千葉県印西市・松山下公園総合体育館
日　程　３月23日（土）開会式、男女予選１
３月24日（日）男女予選２
３月25日（月）男女決勝、表彰式

公式サイト：http:// www.jma-sangaku.or.jp

平成30年度 山岳レスキュー講習会（積雪期・東部地区）報告

平成30年度積雪期レスキュー講習会が１月25（金）～27日（日）まで谷川岳土合山の家周辺でおこなわれた。この講習はtotoの助成金を受けて開催されクラス１、クラス２、クラス３の講習を行い43名が受講。

大阪から車で向かいながら沼田を過ぎても月夜野を過ぎても少量の雪しかなく「本真に雪あるんかいなぁ？」と一抹の不安を抱きながら土合山の家に着いたとたん「なんじゃこら！」周辺は前日からの積雪で1.5ｍは積もっている。「よっしゃ！」ここから３日間雪の中での本番さながらの講習が始まった。

開校式後は全員で日本雪崩ネットワーク（ＪＡＮ）の出川講師より雪崩現象について学んだ。その後各クラスに分かれ講習開始。

クラス１は主任講師、服巻専門委員、講師はＪＡＮ出川講師。受講生16名。ＪＡＮのセーフティーキャンプに準じたカリキュラムで１日目は室内で雪崩現象や雪崩地形、降雪と積雪、積雪の不安定性、雪山・雪崩地形での行動、埋没者の捜索救助等。２日目、３日目は屋外。吹雪の中、積雪観察、雪質観察、ビーコン操作等悪天で地形判断等までは出来なかったが講習中に雪崩が実際に発生するなど本番そのものの講習で有った。

クラス２は２班に分かれＡ班を主任講師松本（光）専門委員、受講生７名。Ｂ班は主任講師井上常任委員。受講生８名。１日目はビーコン、プローブの基本操作、掘り出し（Ｖ字コンベアベルト）、埋没体験等を行い夕食後クラス３と合同で「低体温症」の座学を行う。２日目は午前、午後で入れ替わりビーコン操作、プロービング、スノーマウント構築、初期救助のロープワーク、支点構築、引き上げ、引き下ろし。16時ころより室内で搬送用シート梱包。３日目は前日にスタッフが

吹雪の中での掘り出し風景

開講式での委員長挨拶

埋めたダーミーをビーコンを使って捜索、掘り出し、梱包、搬送までをシュミュレーションとして行う。このクラスでも講習中にすぐ近くで雪崩が発生するアクシデントが有った。

クラス３は主任講師、角田専門委員。受講生12名。このクラスはチームレスキューを基本としたクラスでビーコンやプローブ操作はもちろんロープワーク、支点構築、掘り出し梱包等３日間を通じて本番さながらの講習を行った。

２日目夜は意見交換会も行われクラス、都道府県を越えた交流も図られた。

受講生の皆さんは、誰もが熱心で３日間通して吹雪の中での講習、本当にご苦労様でした。

＊

今回の講習会では講習会中に２人、終了後にも数名のインフルエンザ発症者が出るなど講習とは違った意味でのリスクマネージメントの必要も感じた。

また来年受講される方もおられるでしょう。どこかの山でお会いする事もあるでしょう。その時はひと言「まいど！」

（遭難対策委員会副委員長　石田　英行）

エキゾチックな魅力あふれる国の知られざる大自然を歩く

ボスニア・ヘルツェゴビナ最高峰登頂と世界遺産モスタル 9日間

発着地	出発日	旅行代金
東京	6/26(水)・9/7(土)	398,000円

※燃油サーチャージ(2019年2月20日現在：目安約21,000円～41,000円)が別途必要です。

旅行企画・実施　観光庁長官登録旅行業第490号／日本旅行業協会正会員／ボンド保証会員

アルパインツアーサービス株式会社

本社 〒105-0004 東京都港区新橋3-2-5(第5東洋海事ビル4階)☎03-3503-1911
大阪☎06-6444-3033　名古屋☎052-581-3211　福岡☎092-715-1557
e-mail:info@alpine-tour.com　http://www.alpine-tour.com

第９回自然保護指導員研修会の実施報告

平成31年１月27日13：30～16：30、国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて、関東地区から53名が参加して第９回自然保護指導員研修会を開催したので概要を以下に報告する。

冒頭、岡田博行都岳連自然保護委員長から主管者挨拶があり、次いで、松隈豊委員長から主催者挨拶を兼ね自然保護指導員制度の仕組みについて説明を行った。そのあと、茨城、栃木、埼玉、東京、神奈川から自然保護活動の状況報告を、そして基調講演として、「登山道は奇跡の道」演題に、環境省の徳丸久衛氏から私人としての立場で１時間ほどのレクチャーを拝聴した。講演の概要は次に記載する。

（徳丸久衛氏講演の要約）

国民のほぼ10人に１人が山歩きといわれるほど、大衆的なレジャーの頂点として登山愛好者人口が膨らんだ。老若男女の域を超え愛好者が広がったことや外国人登山者の来訪もこの増加の要因となっている。これに呼応して顕著となった山岳遭難事故の増加も見逃せないが、ここでは登山道問題を焦点に話を進める。

この登山者増加によって、登山道をはじめとする山の施設の整備、維持管理は時代の推移に追いつかず最小限の手当に留まっていると言った問題に直面している現実としてある。多くの場合、登山道を辿って頂上を目指ことに登山の意味があり、登山道があっての登山という行為と言って過言ではない。この登山道は自ずと別世界の山岳自然へ誘ってくれる道であるから、これは、まさに「奇跡の道」と言えるであろう。したがい、我々はもっと登山道を敬い、その恩恵に感謝すべきもので、登山は今の時代単なる「遊び」ではなく、自然とのふれあい、心身の浄化、生きる力の増進など、現代人に必要な効能を兼ね備えた活動であろう。

熱心に聴講する参加者

講師の徳丸久衛氏

次に登山の効用と計画的かつ積極的な登山道等整備の必要性について考察してみる。ただし、ここで論じる登山とは基本的に山を歩いて登る行為で、急峻な地形をロープやハーネス等の登攀器具を使用して登る行為や積雪期の登山についても除外をしておく。

登山の効用について、個人的側面と社会的側面を二つの面から列挙すると次の通りとなる。即ち、個人的側面として、①山の自然や景観を享受することによる感動、精神的保養、自然への畏敬など霊的教化、②山の自然や文化を学ぶことによる知的教化、③負荷をかけて歩くことによる身体能力の向上、精神的修養、④自然の中における生活能力、技術の獲得、⑤行程、装備、行動等の計画能力向上、⑥他の登山者を思いやる心の醸成、マナーの獲得、⑦同行者のある場合は団体行動能力、協調性の向上、⑧危険の予測、対処能力の向上。

次に社会的側面として、①国民の自然を大切にする心を醸成し、自然共生社会の推進に資する、②国民の健康を増進し活力のある社会の形成に資する（社会保障の削減にも貢献）、③国民の防災能力、避難能力の向上、④国民の相互補助精神の向上、⑤山岳宗教や歴史の学習を通じた文化意識の向上、⑥登山器具、携行食、衣料等にかかる産業の発展、⑦登山基地となる観光地、温泉地、交通拠点等の振興、⑧登山道の整備・維持管理やガイド業などの雇用創出、⑨外国人登山者の流入による新たな観光振興と日本のイメージの向上。

従い、登山は国民がそれぞれ個人の資質に応じて可能であれば行うべきものであり、社会としてもそれなりのサポートすべきものであるし、登山道及びその付帯施設（標識、案内板、簡易誘導施設、鎖、ハシゴ、山小屋、避難小屋、トイレ、野営場、水場、休憩所等の整備、維

持管理体制の確立は、計画性と積極性をもって早期に推進されるべき重要な課題であると考える。また、登山道等の整備は、自然環境の保全に直接資するものであるともいえる。

以上の効用が考えらえるにもかかわらず、登山道や関連施設の利用において、登山道等の管理者が明らかで、整備、維持管理が制度的に実施されている例が少ないわけではないが、それは日本全体の登山道等の、需要量からすれば「ほんの一部」と言えるのではなかろうか。また、これまで登山道等の整備にあたって適正な収容力という概念は適用されておらず、オーバーユースという問題が生じている山もある。

では、何が障壁なのかを考えるとき、概して次の項目があると考える。すなわち、①責任者が曖昧であり、従って未執行の責を負う者もいない、②いつまでに整備等をすべきか定められていない、③十分な財源、組織がない、④整備・管理者と登山者との責任論が不明確である、⑤整備・管理者にとってメリットが実感できない場合が多い、⑥整備に当たって適正収容力という概念が適用されていない。

これらの障壁を解消する政策として、「登山道法」的なルールの整備化が望まれる。総合的に実施するため、登山というものを正面から捉えた新たな法整備が最も合理的で効果的と考えられる。

ちなみに、スイス、英国、米国、ニュージーランドなど欧米諸国ではハイキングのためのトレイルの整備に関する法律が制定されている。米国の有名なアパラチアン・トレイル、パシフィック・クレスト・トレイルなどは「The National Trails System Act」に規定され整備・管理されている。

2014年の「国民の祝日に関する法律」の改正により、８月11日が「山の日」に制定され、新しい祝日（2016年施行）となった。同法によれば「山の日」は「山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する」日とされている。この祝日の趣意が活かされるためにも登山道等の充実は重要である。「山の日」は山を愛する人たちの強い意志が政府を動かして実現したものである。これに引き続き、次は登山にかかる法の制定を目指して、山岳愛好家、山岳団体、山小屋など登山施設の経営者、登山に関わる観光事業者、学識経験者、産業界、さらにはまた修験道をはじめとする山岳宗教団体など幅広い方々の一致団結と力強い活動を切に希望したい。そうなれば日本が、スイスにも劣らない、世界からハイカーの集まる、美しい山の国になる日も近いと確信するものである。

＊

最後に「この『奇跡の道』への展開について多くの登山者のみなさんなどと一緒に考えて行きたい。」とし、氏はレクチャーを結んだ。　（自然保護委員長　松隈　豊）

2018/2019 ISMFワールドカップ参戦記

今シーズンのＩＳＭＦ（国際山岳スキー競技連盟）主催のワールドカップは、１月18日のオーストリア大会に始まり、４月３日のイタリア大会まで全６戦が行われます。

各大会で実施される種目数は異なりますが、ワールドカップで実施されているのは全３種目です。内訳は山岳地帯で複数回のアップダウンを繰り返して競うインディビジュアル、登りだけで競うバーティカル、ゲレンデにコンパクトなコースを設定し競うスプリントの３種目が実施されています。

私は今シーズン、ワールドカップ全戦への出場を計画し、現在、転戦を続けています。この参戦記では、執筆時点までに終了した４戦について書きたいと思います。

開幕戦の舞台はオーストリアのビショフスホーフェン。毎年、スキージャンプのジャンプ週間が開催されることで有名な街です。ちょうど私が訪れた直前にはジャンプ週間の最終戦が当地で行われ、日本の小林陵侑選手が４戦全勝で優勝を飾ったことがニュースで話題となりました。私たちのワールドカップも同じジャンプ競技場、パウル＝アウサーライトナー・シャンツェを主会場とし、休養を挟んだ３日間の日程で行われました。

オーストリア大会の実施種目はスプリントとインディビジュアル。初日のスプリントはナイターで行われ、ノーマルヒルをシールとつぼ足で登り、ラージヒルを滑り降りるというコースで行われました。夕方になりナイター照明が灯ると、街からたくさんの観客がシャンツェに集まります。シャンツェには大型スクリーンが設置され、テレビカメラやドローンから届く映像を映し出して

います。また、仮設の大型レストランがあり、観客はそこで食事やビールを楽しみ、週末の夜にレースを観戦します。会場には軽快な音楽が流れ、司会者がレースの見どころを解説して場を盛り上げています。

会場の雰囲気も整ったところで予選がスタート、私も多少の自信を持って出場しましたが、ヨーロッパでのデビューは完走53人中53位。見事に厳しい洗礼を受ける結果となりました。

翌日もシャンツェを発着点とし、隣接する山岳地帯を使ったインディビジュアルレースが行われ、完走54人中54位。最初から他の選手のペースに着いていけず、自分のこれまでの取り組みを根本から見直すきっかけとなりました。

第２戦は翌週、ピレネー山脈に囲まれたアンドラ公国へと舞台を移し行われました。アンドラは冬はスキー、夏はトレッキングやマウンテンバイクが盛んなアウトドア大国です。

麓のオルディノという街に式典会場が設置され、アルカリスというエリアでインディビジュアル、アリンサルというエリアでバーティカルが行われました。街中に大会ポスターや看板が設置され、式典会場付近は歩行者天国になるなど、街を上げての盛り上がりです。

今回、車を持たない私はアンドラ山岳スキー協会々長のご家族から移動のサポートを受けました。道中の車内ではアンドラの山岳スキー文化や歴史などについてお話を伺うことができ、とても有意義な時間となりました。他の大会でも同様でしたが、私はアジアから唯一の出場者ということで、ＩＳＭＦ役員、他国チーム関係者、観客の方々から本当に良くしていただきました。

オーストリアからアンドラに移動して来て、３日間程かけてコースを下見。下見をしながら週末のレースまで、積極的に他国の選手を観察しました。初戦でまったく通用しなかったことから、強い選手の技術を徹底的に真似ることから始め、自分の動きを修正していく作業を行いました。

レース初日はインディビジュアルで完走45人中44位。やっと１人ですが勝つことができました。この時に競ったシャア（ブラジル）とはこれ以降、良き友人であり、良きライバルとして上位を共に目指す仲となりました。

２日目はゲレンデを使ったバーティカル。アンドラではゲレンデに登ることが出来るコースが常設されていて、スキー場のパンフレットにもワールドカップのコースが明記されています。日頃からゲレンデを使って山スキーを楽しめる環境があることに、当地の選手の強さの理由を感じました。

レースはゴールまで途切れることのない観客の列に囲まれて行われました。様々な言語の声援が飛び交う中、調べてくれたのか時々、「ガンバレ」も聞こえてきて大変励まされました。この日もシャアとの接戦。標高2300ｍのゴールを目指して何度もスパート合戦をしたので、二人ともゴール後は倒れこむほどでした。

この日も完走50人中50位。順位こそ同じ最下位ですが、前戦では他国選手にまったく着いて行けなかったものが、アンドラでは少し着いていけるようになりました。

第３戦はさらに翌週、舞台をフランス南部のスーパーデヴォリュイへ移し行われました。スーパーデヴォリュイはマルセイユから北へ列車で３時間、バスで１時間のデヴォリュイ山地にある広大なスキーエリアです。天気が良いとゲレンデから北東の方向にマッターホルンが望めます。火曜日に現地入りし、水曜日からコースの下見を開始しましたが、大雪でバックカントリーエリアはアバランチレベルが連日４～５を推移する状況、大会事務局からもバックカントリーエリアの下見は避けるようにと指示がありました。

週末になっても天候は変わらず、初日のインディビジュアルはゲレンデ内に周回コースを設定して行われました。私が出場した成年男子はコースを４周。２周目

までは前を行くアンドラの選手を視界に入れてレースを進めましたが、３周目の下りでトップグループ５人に追いつかれ周回遅れとなりました。この時はトップグループの滑降とゴール前の争いを間近で見る機会となり、緩斜面でもスピードに乗せられる高い滑走技術と、ゴール前の素早いシール装着、切れのあるラストスパートと世界トップの迫力を感じました。結果は完走51人中51位。

翌日のスプリントは天気が回復し、まずまずのコンディションで実施。とにかく予選突破だけを狙って飛ばしますが、中盤で失速し52人中52位。

ヨーロッパ３連戦を厳しい結果で終え、２週間のインターバルの後、第４戦の舞台は中国へ。中国大会は中国北東部、長春市の松花湖リゾートで開催。インディビジュアル、バーティカル、スプリントの３種目が行われました。

理由は様々ですが、この大会にはヨーロッパの多くの国が参加せず、参加国はドイツ、スペイン、オーストリア、ロシア、ブラジル、中国、日本の７カ国。ワールドカップとしては寂しい大会となりましたが、参加した選手もしなかった選手も、そしてＩＳＭＦ役員にも共通したキーワードは「World Cup is World Cup,Win is Win」という言葉でした。長いシーズン中にどの大会に出て、出ないかは各国が戦略として決めることであり、その部分も勝負の内と言えます。ワールドカップはワールドカップ、出場することを選んだ私たちにとっては上位を狙える大会となりました。私はこの中国大会でインディビジュアル６位、バーティカル９位、スプリント６位の成績を残すことができ、スプリントでは決勝６人の内、アジアから唯一のファイナリストとなりました。ワールドカップポイントも３種目合計で109点を獲得し、現時点での暫定ランキングを19位とすることができました。今後は３月中旬の世界選手権を経て、第５戦スイス、最終戦イタリアと回る予定です。更なるポイント獲得には

厳しいレースを勝ち抜く必要がありますが、最終戦まで積極的な姿勢だけは貫こうと思っています。最終的な戦績については、あらためて何らかの形でご報告できれば幸いです。

さて、ヨーロッパ各国ではすでに五輪を視野にナショナルチームが整備されていて、厳しい選考を勝ち抜いた選手が国際舞台で活躍をしています。各ワールドカップには国内大会も併設されていましたが、そのレベルは日本選手権に迫るか、それ以上のレベルであると感じました。日本においても競技の普及と底辺の拡大、そしてナショナルチームの整備が世界に遅れないためにも重要になってくると思います。私も一人の選手として、日本の競技の発展のために尽くしていければと考えています。

最後になりましたが、ワールドカップ転戦にあたり、ＪＭＳＣＡ山岳スキー委員会の皆様、所属する三重県山岳連盟、朝明アルパインクラブの皆様から多大なるご協力とご支援をいただいていることに対しまして、感謝の気持ちをお伝えいたします。

（三重県山岳連盟　朝明アルパインクラブ　小寺教夫）

第13回山岳スキー競技日本選手権大会

期　日　2019年４月６日（土）～７日（日）
会　場　長野県北安曇郡小谷村・栂池高原スキー場
日　程　４月６日（土）
9:00 ～ 11:00　バーチカル競技
13:00 ～ 16:00　インディヴィジュアル受付
16:00 ～ 17:00　開会式、バーチカル表彰式
４月７日（月）
9:30 ～ 13:00　インディヴィジュアル競技，
13:30 ～ 14:30　表彰式、閉会式
参加費　１種目参加10,000円　２種目参加12,000円
18歳以下は、１種目4,000円、２種目6,000円
申込先　（公社）日本山岳・スポーツクライミング協会
FAX 03-3481-2395
E-mail:info@jma-sangaku.or.jp
http://skimojapan.wixsite.com/skimojapan

競技種目
- バーチカル（Vertical）：ゲレンデ内に設定された標高差500mの斜面をシールを付けたスキーで登る速さを競う種目。登りのみで滑降は無し。
- インディヴィジュアル（Individual）：山岳エリアに設定された上り下りを含む水平距離14km、総標高差1,400ｍのコースを山スキーを使って走破する速さを競う種目。（女子、ジュニア、カデットは、もう少し短いコースとなる。）

カテゴリー
シニア男女（21歳以上）、ジュニア男女（20～18歳）、カデット（17～15歳）

平成30年度全国理事長会議報告

２月17日（日）に都内の渋谷フォーラムエイトに於いて平成30年度全国理事長会議が開催された。会議には役員・委員長20名、加盟団体理事長（代理を含む）48名が出席した。

開会に先立ち、八木原会長から「登山界を取り巻く環境が激変している。我々自身が変わらないことがリスクだと思う。」と挨拶された。

次に以下の事項が報告された。

1．次期役員改選について
2．加盟団体の法人化の推奨について
3．平成30年度事業経過報告について
4．平成30年度決算見通しについて
5．平成31年度事業計画（案）について
6．平成31年度収支予算（案）について
7．加盟団体の調査報告について
8．国体山岳競技規定の改定について
9．東京2020オリンピックの選手選考について
10．競技審判員及びルートセッターの登録について
11．CLUB JMSCA ITADAKIメンバー制度について
12．施設賠償責任保険及び個人賠償責任保険について
13．税務調査結果について
14．新事務所移転について
15．諸般の報告について
①全日本登山大会及び安全登山指導者研修会の開催スケジュールについて
②岐阜県山岳連盟から第58回全日本登山大会の開催概要について
16．日山協山岳共済会の平成30年度事業経過報告及び平成31年度事業計画（案）・収支予算（案）について

質疑応答では、選手登録に関してのＡＤ研修及び倫理研修について。競技審判員・ルートセッターの登録システムについて。個人会員について。国体山岳競技規定改定の進捗状況について。ブロック別研修会における配布資料の文言について。などの質疑があった。

JMSCA

平成30年度（31年２月）
常務理事会報告

日　時　平成30年２月７日㈭18時～21時
場　所　岸記念体育会館４Ｆ特別会議室
出席者　八木原会長、亀山、髙橋、伊藤、平山の各副会長、尾形専務理事、小野寺、水島、相良、村岡、合田、小日向、仙石、蛭田、町田の各常務理事、中畠、古屋監事（17名中17名出席）
同席者　西原国体委員長

１．議　事

⑴平成30年度（31年）１月常務理事会・議事録の承認について（事前送付済）
異議なく承認された。
⑵平成30年度（31年）１月臨時常務理事会・議事録の承認について（事前送付済）
異議なく承認された。
⑶国体規定改定について
リード競技についてＩＦルールで行った場合の所要時間の長さ、ルートの違いが問題になった。団体に関する国体ルールについてはＪＳＰＯに確認することになった。リードクライミングの所要時間については、シミュレーションしてみることになった。スピードとコンバインについては継続検討とする。
以上のことを再検討して次回常務理事会に再提案することになった。
⑷各岳連法人化推奨について
「加盟団体規程」の一部改定について提案があり、異議なく承認された。
⑸選手登録規程細則改定について
一部文言追加のうえ、異議なく承認された。
⑹ＪＭＳＣＡメンバーについて
「ＣＬＵＢ ＪＭＳＣＡ ＩＴＡＤＡＫＩ」に関する規程の変更が提案され、異議なく承認された。
⑺2019年度事業計画及び予算（案）について
事業計画は、一部訂正し、後日承認となった。予算案は、概要の説明があり、次回常務理事会に提案。
⑻2018年度補正予算（ＳＪＣ）について
第３次補正予算案の提案があり、異議なく承認された。
⑼海外登山奨励金選考結果について
「日本カーメン峰登山隊2019年」に奨励金40万円を交付することが、異議なく承認された。
⑽その他
銀行からの借入限度額について

２．報　告

⑴１月度月次決算報告
相良常務理事から資料に基づいて報告があった。
⑵全国理事長会議への質問事項
小野寺常務理事から資料に基づいて報告があった。
⑶2020年春の叙勲候補者推薦について
１月常務理事会で内藤監事を推薦したが、本人から固辞されるとの報告があつた。
⑷第14回ＢＪＣについて
大会終了の結果報告があった
⑸今後のスポーツクライミングの予定について
村岡常務理事より資料に基づいて報告があった。
⑹夏山リーダーＵＩＡＡ認定査察について
８月中旬の予定となった。
⑺日本代表チームの派遣先の在日本大使館への表敬について
⑻フランス協会との友好関係について
柔道のような関係を結びたいとの提言があった。

３．指導員・審判員　検定結果報告

ア）山岳指導員認定
①東京都山岳連盟
秋山喜夫，五十嵐有紀，佐藤学，
阿部良次，国分たか子，島田義信，
高井浩一，岡留三郎，末廣八千代，
高橋　浩之，中野　永一，日高一郎，
藤田智子，中畠正喜，山根　進，
渡辺智世，宮崎薫，斎藤真樹，青木敏彦，
山村泰我，菊地仁美，古澤幸男，
飯澤喜一郎，菊地等，加藤直明，
小林陽子，上田恭裕，　本尾眞，高垣二郎，
高垣由美子，木村秀樹，松林雄介
②群馬県山岳連盟
岡本隆，友野雅晶，松嶋一幹、三田治宣、
小池寛喜、根岸仁，細野義法、
岡田　英喜、渡邊啓介、阿左美卓己、
小川美穂、清水裕美子，永井敏彦、
林佳男、松田和昭、松原美成子、
武藤チエミ、金子一実，毛呂憲治、
安藤英一
③福島県山岳連盟
甲髙学
イ）スポーツクライミング指導員認定
①鹿児島県山岳・スポーツクライミング連盟
内野武夫，小倉真理子，白濱淳，
福田裕之，田崎力也，陣内健太，
春田英男，井田　浩聡，斎藤俊貴，
谷口候子，牧田正信
ウ）スポーツクライミング上級指導員認定

①東京都山岳連盟
中島陽子、豊岡貴寛、早石利枝、
鈴木　学、濱田剛
上記については、異議なく承認された。

4．援報告、協賛等の依頼について
⑴大阪府岳連チャレンジ登山後援名義承認
⑵玉野市王子ケ岳清掃登山活動後援名義承認
上記２件とも異議なく承認された。

5．　専門委員会動静　１月10日～２月４日
⑴国際委員会
１月10日㈭　出席８名、欠席４名
ア）報　告
・ＢＭＣ夏のクライマーズミート
５/12－19　（国内締め切り１/18）
・マウンテンスピリット2019（キルギス、レーニン峰）
７/26－８/15（締め切り５/15）
・国際トラッドロッククライミングフェスティバル（カザフスタン、アルマトイ）
８/29－９/４（締め切り５/１）
イ）協　議
①来年度の海登研・総会について
６/22㈯、23㈰、池尻大橋の「大橋会館」を予約。
⑵ＳＣ医科学委員会
１月12日㈯　アルカディア市ヶ谷
出席５名、委任５名
ア）競技会医務担当割り当て
①ＢＪＣ（１/26、27，駒沢、東京）
大森委員、加藤委員、岡坂委員が担当
②ＳＪＣ（２/10，昭島、東京）
大森委員、樋口委員が担当
③ＬＪＣ（３/２、３，　印西、千葉）
六角委員、樋口委員が担当
④リードユース日本選手権大会
（３/23、24、25，印西、千葉）
六角委員、樋口委員が担当
⑤FISE World Series Hiroshima 2019
（４/19、20、21，広島、広島）
未　定
⑥ボルダリングユース日本選手権大会
（５/18、19，倉吉、鳥取）
未　定
１）各業務担当委員報告
①救護担当（中島委員）
ａ）全国高等学校選抜スポーツクライミング選手権大会（12/22、23、加須、埼玉）報告
②学術担当（代、六角委員）
ａ）論文関連
登山医学会誌に大森委員の論文「スポーツクライミング競技会における皮膚外傷」が掲載された。
③強化連携担当（六角委員）
ａ）12月12日　ＪＩＳＳにてメディカルチェック（六角委員、西谷委員）
９名（男子５名　女子４名）
ｂ）12月８日（京都）、12月16日（東京）
選手スタッフ合同ミーティング
④パラクライミング担当（樋口委員）
2019年１月に日本選手権が明治大学体育館にて開催予定。担当に協力を打診したが、パラクライミング協会内のメディカルスタッフで業務を行なうと連絡があった。
ウ）来年度予算関連
①今年度概要
②来年度予算案の説明
⑶技術委員会・ルートセッター会議
１月19日㈯　岸記念体育会館　出席12名
ア）2019年度全国大会チーフ・ルートセッター選定について
イ）セッター昇格候補者選定について
ウ）セッター認定会新評価点採用について
エ）オリンピックＮＴＯルートセッター選定について
オ）国内主要大会セッターの選定方法について
⑷遭難対策委員会
１月27日㈰　土合山の家　出席16名
ア）夏山リーダーに関するＵＩＡＡ認証の進捗状況について
①ＵＩＡＡに提出する英語版シラバス完了。
②夏山リーダーの窓口としての組織を指導委員会の中に設置する。
③第１回検定を千葉で行う。（４月実施予定）
④ＵＩＡＡ認証査察について
８/12～20、那須で実施予定。
⑤第２回研修会について
３/16～17に神奈川県山岳スポーツセンター
１）共済会加入者数の拡充について
ウ）ココヘリ加入状況
12月27日から共済会加入者に対し入会無料のサービスを開始。既に加入者は30件を超えた。
エ）冬山レスキュー講習会の報告および反省
⑸指導委員会
２月４日㈪　出席12名委任４名
ア）新指導者制度について
①2019年度カリキュラムの提出について
②2019年度の規程・規約集の改修について
ＪＳＰＯ公認規定・規約集、ＵＩＡＡ公認規定・規約集
イ）夏山リーダー講習会および検定会について
①夏山リーダー委員会の組織について
②第２回講師養成講習会の開催要項発信について
③ＵＩＡＡ認定査察までに検定の実施について
④ＵＩＡＡ認定査察内容について
⑤ＵＩＡＡ認定査察に日程について
⑥一般登山者に講習会を受講してもらうプロジェクトについて
⑦ＵＩＡＡ夏山リーダーの規定・規約集について
ウ）大山の氷雪技術研修会について

6．その他の重要事項
１月12日～２月３日
⑴新春顧問・参与会　１月12日㈯
於：アルカディア市ヶ谷　八木原会長他
⑵2019年新春懇談会及表彰式
１月12日㈯　於：アルカディア市ヶ谷
八木原会長他
⑶平成31年度安全登山指導者研修会連絡会議　１月13日㈰　於：アルカディア市ヶ谷
尾形専務理事、仙石常務理事
⑷アマチュアスポーツ新春懇親会
１月16日㈬　於：ＮＨＫ本館
尾形専務理事、小野寺常務理事
⑸ＩＦＳＣマルコ会長来日　１月21日㈪～27日㈰　於：東京オリパラ組織委
八木原会長、平山副会長、尾形専務理事、小日向・村岡常務理事
⑹第14回ボルダリングジャパンカップ
１月26日㈯～27日㈰　於：駒沢オリンピック公園総合運動場屋内球技場
八木原会長、平山副会長、尾形専務理事、村岡常務理事
⑺レスキュー講習会 積雪期東部地区

寄贈図書

雑誌	Club alpino italiano	「Montagne360」febbraio 2019
	(株)ネイチュアエンタープライズ	「岳人」No.861
	(株)山と渓谷社	「山と渓谷」2019年３月 No.1007
会報	HAT-J	HAT-J NEWS №112
	兵庫県山岳連盟	「兵庫山岳」第620号
	愛知県山岳連盟	「愛知山岳ニュース」第431号
	埼玉県山岳連盟	「埼玉岳連」第63号
	日本勤労者山岳連盟	「登山時報」No.529
	日本防火・防災協会	地域防災 No.24
	東京野歩路会	「山嶺」Vol.96 No.1068
	(公社)日本山岳会	「山」２月号 No.885
	やまびこ山想会	「やまびこ」第181号
	おいらく山岳会	「山行手帖」No.711

1 月 25 日㈮～ 27 日㈰　於：土合山の家　町田常務理事

⑻第 2 回東京オリパラ競技大会国内競技団体協議会
1 月 29 日㈫　於：虎ノ門ヒルズ尾形専務理事

⑼ＬＪＣ実行委員会
1 月 31 日㈭　於：印西市松山下運動公園総合体育館

⑽日本山岳写真協会新年会
2 月 3 日㈰　於：上野精養軒八木原会長

表紙のことば

シッキムのラチェン（大きな峠の意）・チュー（川）とラチュン（小さな峠の意）・チューの流れに挟まれたカンチェンジャオ山塊のユレーカンから南下する尾根は、セブ・ラへ向けて一旦高度を下げた後、再び高度を上げてチョンブー（6,362 m）への稜線に続く。

チョンブーは、タングーとユメ・サムドンの間に横たわり、セブ・ラの南方約 4 kmに位置する。ルンナク・ラ付近から眺望するチョンブーは、隣接峰のカンチェンジャオに負けず劣らずの威風堂々とした山容である。

1961 年に初登頂したと云われるインド隊（ソナム・ギャッツォ隊長）の記録は疑問視されており、未踏峰の可能性が高い。

（写真撮影者・尾形好雄）

編集後記

地元市体協主催スポーツ人の集いが平成最後の桃の節句に開催され、スポーツ功労者・成績優秀者表彰式が行われ参列してきた。その中で優秀団体表彰された、地区中体連ソフトボール部主将（女子）の謝辞が印象に残った。スポーツ選手にとって大切なのは次の三つ「仲間」、「あきらめないこと」、「感謝の気持ち」であると明確に述べて、会場より盛大な拍手が送られた。何かとてもすがすがしい気持ちにさせられた。

（広報担当　水島彰治）

一般財団法人 日本トレイルランニング協会

〒252-0184
神奈川県相模原市緑区小渕1545-1
☎042-687-4011　FAX 042-687-3980
E-mail kitatanzawa@kib.biglobe.ne.jp

NPO法人 北丹沢山岳センター
神奈川県・山梨県東部トレイルラン連絡協議会
事務局　〒252−0184　神奈川県相模原市緑区小渕1545−1
TEL 042-687−4011　FAX 042-687−3980
E-MAIL kitatanzawa@kib.biglobe.ne.jp
◦ 北丹沢12時間山岳耐久レース実行委員会
◦ 陣馬山トレイルレース実行委員会
◦ 道志村トレイルレース実行委員会
◦ 八重山トレイルレース実行委員会
◦ 東丹沢宮ヶ瀬トレイルレース実行委員会
◦ 上野原秋山トレイルレース実行委員会
大会々長　杉本憲昭

登山月報　第 600 号

定　価　110 円（送料別）
予約年間　1,300 円（送料共）
昭和 45 年 12 月 12 日
第三種郵便物認可
（毎月 1 回 15 日発行）
発行日　平成31年 3 月15日
発行者　東京都渋谷区神南 1−1−1
岸記念体育会館内
公益社団法人
日本山岳・スポーツクライミング協会
電　話　03 − 3481 − 2396
ＦＡＸ　03 − 3481 − 2395

山岳雑誌 岳人（がくじん）
山と人、時代をつなぐ「岳人」

4月号 発売中

【特 集】残雪の立山
★モンベルのウェブサイト
全国のモンベルストアや書店にて発売中！
毎月15日発売　価格815円(+税)

年間購読がおすすめです。
購読割引　送料無料　限定品プレゼント
年間購読なら、お得な価格で毎月お手元に冊子が届きます。
通常本体価格12冊 ~~9,780円~~(+税) → 年間購読なら12冊 8,965円(+税)
1年間で815円 1冊分無料！

年間購読特典 岳人オリジナルグッズをプレゼント！
岳人ミニワレット（2個セット）
サイズ：9×10cm
※カラーはお選びいただけません
さらに はじめてお申し込みの方に
岳人ピンバッジ
提携施設「岳人の湯」で提示すると入浴料割引などの優待が受けられます。

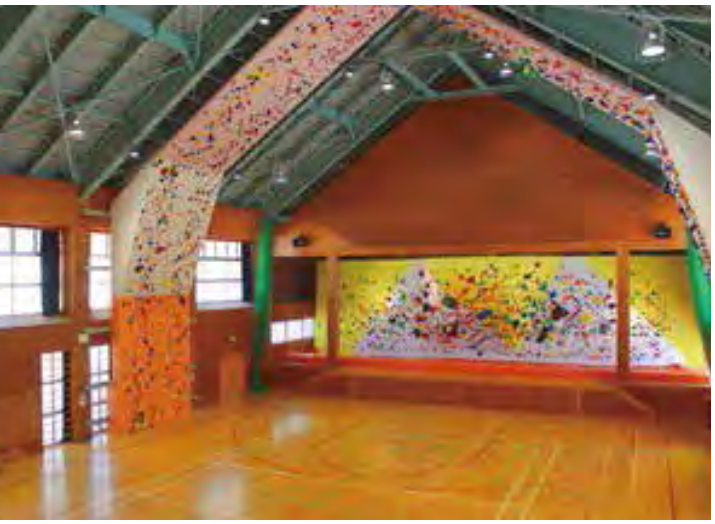
年間購読のお申し込み　WEB https://www.gakujin.jp/　全国のモンベルストアでも受付中！
お問い合わせ　モンベルポスト　0120-982-682／TEL 06-6538-5797
※フリーコールは携帯・IP電話からはご利用いただけません。

あなたを守る。あしたを作る。

三井住友海上

損害保険と聞いて、なにを思い浮かべますか？

ケガ、災害、事故…日々の中で起こりうるリスクをカバーする。それは私たち三井住友海上の重要な任務ですが、すべてではありません。たとえば同じ自動車保険でも、暮らしの変化や自動車の進化を見つめて改善を続けること、宇宙開発や再生医療など、まだ世界にない保険を新しく作ることで社会の前進をサポートすることも、とても大切な役割です。変わらない一日に寄り添い、より豊かな明日を実現したい。だから私たちは、守ることと作ること、その両方を繰り返しながら前へ歩み続けます。



東商アソシエート株式会社 www.climbing-tosho.com Tosho Associate

JMSCA

山岳保険の加入は登山者のマナーです

あなたの山岳保険は大丈夫ですか？

- □ 傷害死亡・後遺障害
- □ 救援者費用
- □ 傷害通院費用
- □ 個人賠償責任
- □ 遭難捜索費用
- □ 傷害入院費用
- □ 傷害手術費用

日山協 山岳共済会 〒170-0013 東京都豊島区東池袋 3-7-11-707

TEL 03-5958-3396 FAX 03-5958-3397

E-mail sangakukyousai@mbd.ocn.ne.jp

月曜日～金曜日 10:00～17:00（祝日除く）

携帯からも資料請求ができます。

公益社団法人 日本山岳・スポーツクライミング協会
携帯サイト（www.jma-sangaku.or.jp/mobile/）

WEBからもお申込みいただけます（www.sangakukyousai.com）